

餅ノ沢遺跡の土器について

野 村 信 生

1 はじめに

餅ノ沢遺跡は、鰯ヶ沢町の北東、岩木山東麓の放射河川である鳴沢川と長前川に挟まれた標高約50mの台地上に位置する。

遺跡は縄文時代前期・中期・後期・晩期、弥生時代中期末葉～後期前葉の複合遺跡であり、縄文時代前期後葉・中期末葉が主体である。遺跡からは膨大な遺物とともに、竪穴住居跡7軒・石囲炉25基・配石遺構10基・石棺墓4基・埋設土器5基・土坑39基・遺物包含層1ヶ所・捨て場2ヶ所が検出されている(注¹)。遺物の大半は第1号遺物包含層、第1・2号捨て場から出土しており、第1号遺物包含層・第1号捨て場は中期末葉の大木10式に平行する土器が主体となり、第2号捨て場は前期後葉の円筒下層d式土器が主体となる。また第1号遺物包含層・第1号捨て場からは多数の土偶・ミニチュア土器・土製品等が出土しており、祭祀的性格を彷彿とさせる。

これらの土器については、当該遺跡の調査報告書(県埋文 2000)において第I群～第XV群に分類しており、第VI群の円筒下層d式及び第X群の大木10式併行の土器は、細分の可能性があるが一型式の範疇にとどめて報告した。とくに第X群は中期末葉～後期初頭と広範囲に設定したが、これは膨大な出土資料に対しての時間的制約と自身の能力不足によるものである。報告書における認識不足による記載、及び誤記等の訂正を含め、本稿ではその「まとめ」として掲載することにする。

2 縄文時代中期末葉～後期初頭の土器編年—略史—

本遺跡は中期末葉を主体とすることから、該期の土器編年について若干ふれることにし、本稿における中期末葉～後期初頭の認識について述べる。

大木10式土器については、丹羽茂が4段階への変遷を示しており(丹羽 1981)、本間宏はその分類の不明瞭さを指摘しつつ、丹羽の細分を古・新段階として分類した(本間 1985・1987)。成田滋彦は地縄文に沈線文を施す土器群を大木10式併行土器として捉えた(成田 1984)。本県における該期の土器には、地縄文に沈線文を施す一群と地縄文に沈線間を無文とした文様で構成される一群が存在し、その二系統を軸とした変遷・地域性が論じられている。鈴木克彦も大曲1式をa～c式(5～6段階)に細分し、地縄文に沈線文を施す一群をA種とし、磨消縄文を施す一群をB種としている。A・B種が共存する地域は津軽・下北・上北地域が主体で、三八地域にはB種しかみられないことを指摘し、A・B種が共存してみられる地域を大曲1式の文化圏としている(鈴木 2000)。

本稿における中期末葉～後期初頭の土器編年は、中期末葉を東北中南部の大木10式に併行する段階とし、初頭においては本間による上村式から葦窪式への変遷を軸とし(本間 1985・1987・1988)、成田の牛ヶ沢(3)式(成田 1989)を上村式の併行段階とした。前葉となる十腰内I式の直前段階としては、成田の方形区画文系統とされる沖附(2)式から三角形区画文系統とされる弥栄平(2)式への変遷(成田 1989)をここでは同一段階として捉えた。

3 出土土器

本遺跡からは多数の土器が出土しているが、良好な共伴事例は少なく、重複による層位的出土も認められなかった。また残存状態は悪く、詳細な文様構成を把握できる土器は少なかったといえる。以下に遺構内から出土した土器について述べ、さらに第1号遺物包含層、第1・2号捨て場についても主体となる時期を中心に述べることにする。

(1) 遺構内出土土器 (図1～2)

第1号竪穴住居跡 (図1) 埋設土器として、体部上半が欠損する深鉢が出土した(1)。外面に羽状繩文が施される前期後葉～中期前葉の土器であり、円筒上層a式的要素が強いと思われる。また覆土から円筒上層d式(2)、14層(覆土下位)と覆土からは、中期後葉の楓林式土器の出土がみられる(3～6)。 **第2号竪穴住居跡** (図1) 2基の土器片敷き石囲炉(SF12・13)が確認された。SF12からは口縁部は欠損するが、頸部にかけて内反する深鉢が出土した(10)。文様はLRの地文に曲線的な沈線文を施し、沈線間は磨消しにより無文となる。また、沈線の曲部には鰐状の貼付けが施される。SF13からは体部中央で内反し、口縁部が外傾する深鉢が出土した(11)。文様はLRを地文とし、口縁部は無文となる。また床面からは、波頂部に円孔を有する口縁部片(12)、LRを地文とし、曲線的な沈線文を施す胴部片が出土している(13)。2基の炉は残存状態が良いことから、住居の建て替えに伴い最終的には併存したと思われ、10・11は共伴性がたかい土器といえよう。これらは中期末葉の大木10式に併行する土器である。 **第6号竪穴住居跡** (図1) 床面から同一個体と思われる土器片が出土した(14～17)。これらは壺の頸部・胴部片で、頸部には横位沈線と縦横に鋸歯状沈線が施文され、胴部にはLRがみられる。これらの土器は、念佛間式あるいは天王山式に一致する特徴がみられることから、弥生時代中期末葉～後期前葉の範疇と考えられる。 **第7号竪穴住居跡** (図1) 土器片敷き石囲炉(SF3)から2個体の土器が出土した(18・19)。これらは胴部から頸部にかけて内反し、口縁部は外反する深鉢である。LRの地文に曲線的な沈線文を施す。18は繩文と無文のコントラストにより文様を構成する。波状沈線に区画された体部下半には繩文が施され、体部上半は繩文を施したS字状沈線文と無文帯から構成される。19は波状沈線に区画された体部上半に、S字状沈線文が施される。これらは同一の炉から出土しており、共伴性がたかい土器といえよう。20・21は床面付近から出土し、20は地文にRLが施され、波状沈線で区画された体部上半にS字状沈線文が施される。21はRLのみが施される土器である。これらは大木10式に併行する土器である。 **第1号埋設土器** (図1) 壺と蓋として転用した深鉢の破片が出土した。壺(22)は胴部中央に最大径をもち、口縁部にかけて内反する器形である。地文にRLを施し、波状沈線で区画された胴部上半に、逆U字状沈線文を施す。逆U字状沈線文内と波状沈線付近には繩文が残存するが、それ以外は磨消しにより無文となる。深鉢(23～25)はRLの地文に曲線的な沈線を施文する。これらは大木10式に併行する土器である。 **第4号埋設土器** (図1) 2個体の深鉢が重なった状態で出土した(26・27)。26は口縁部が内反し、外面にはRLを施す。底面には網代痕がみられる。27は頸部で内反し、口縁部は外傾する。外面にはLRを施す。本遺跡からは、粗製土器の時期を確定するのに有効な共伴関係は認められず、詳細は不明であるが、中期末葉～後期前葉の範疇であることは間違いないであろう。 **第2号埋設土器** (図2) 口縁部が欠損する深鉢である(28)。RLを地文とし、体部上半は刻みを施した隆帯により方形に区画される。区画内には沈線間に



図1 遺構内出土土器1

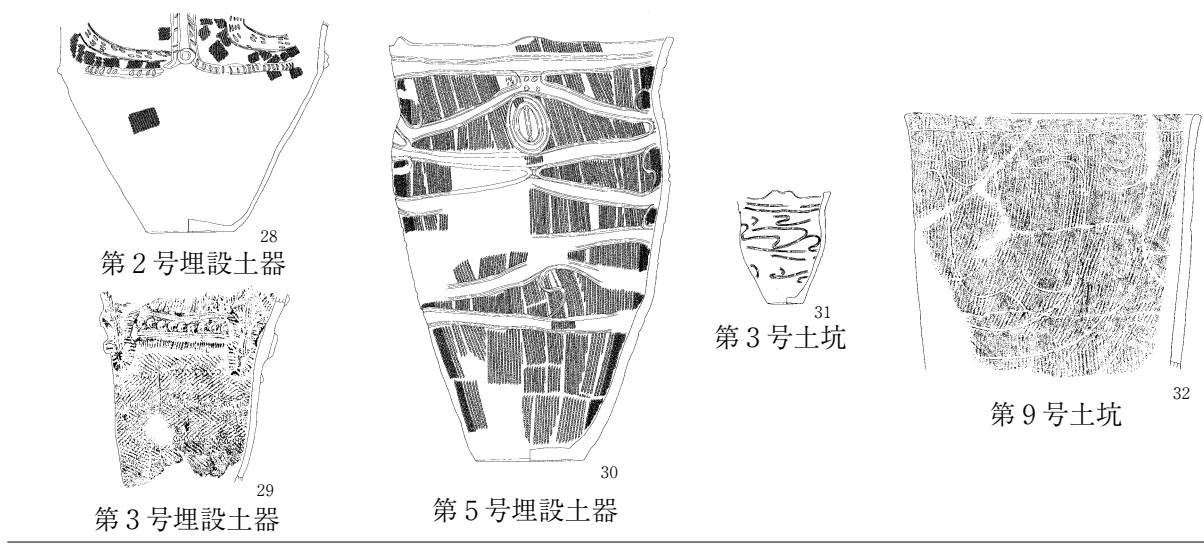


図2 遺構内出土土器2

28~32: S = 1/9

刻みを充填した文様が施される。また隆帯の屈曲部にはボタン状の貼付けが施される。これは後期初頭の初期的段階とされる上村式・牛ヶ沢(3)式に相当する土器と思われる。第3号埋設土器(図2)中期前葉の深鉢である(29)。胴部には羽状縄文が施され、口頸部文様帶は原体を押圧した1条の隆帯で区画されており、直線的な縄文原体押圧と爪形の撲糸圧痕を施す。爪形の撲糸圧痕は江坂輝彌による円筒上層b式のメルクマールであるが(江坂 1956)、他の特徴から上層a式的要素が強いと思われる。第5号埋設土器(図2)後期初頭の大型深鉢である(30)。L単軸絡条体第1類を地文とし、3帯の三角形区画文が横位に展開する。これは青森市螢沢遺跡(螢沢遺跡調査団 1990)から出土した三角形区画文系統とされる第1・2群の弥栄平(2)式に相当する土器である。第3号土坑(図2)頸部で内反し、口縁部が外反する小型鉢が出土した(31)。口縁部には頂部に押圧を施した山形突起がみられる。文様構成は2帯からなり、2条の横位沈線により区画された体部上半と下半には、波状沈線が施文される。文様構成から後期初頭～前葉の範疇と考えられ、三角形区画文系統とされる弥栄平(2)式に相当すると思われる。第9号土坑(図2)口縁部がやや外反する深鉢が出土した(32)。R Lを地文とし、2段のJ字状沈線文を施す。これは中期末葉の大木10式に併行する土器である。

(2) 第1号遺物包含層出土土器(図3)

縄文時代中期前葉～弥生時代後期前葉の土器が出土している。出土総数に比して、復元個体は少なく破片が大半をしめる。包含層の下位からは多数の遺構が検出され、本来的には土器との関連性も考えられるが、残念ながら確認することができなかった^(注2)。これらの主体は中期末葉の大木10式に併行する土器群であり、ここでは大木10式土器を主体にし、その前後型式についても述べる。

中期後葉

最花・中の平3式に相当する土器群である(1～10)。出土総数は少なく、破片資料のみの出土である。鉢(深鉢)・壺がみられる。鉢(深鉢)は口縁部が外反・直上するものがみられる(3～10)。壺は最大径が胴部中央付近にあり、頸部で内反し口縁部はやや外反気味に直上する(1・2)。文様は口頸部に区画帯となる刺突・横位沈線、胴部に展開する沈線による懸垂文・刺突がみられ、区画された口頸

部は無文が主体となる。

中期末葉

大木10式に併行する土器群である(11~24)。出土土器の大半は破片であり、器形全体を把握できる個体は少ない状況といえる。深鉢が主体となり、口縁部は平口縁と波状口縁がみられ、外反・直上するものや、頸部で内反し口縁部が外反するものがみられる。これらを文様的に大別すると、地縄文に沈線文を施すもの(A群)と沈線間を無文として文様を構成するもの(B群)が存在する。これらの文様構成について、A・B各群ごとにみることにする。

A群

- ・口縁部の横位沈線と胴部中央付近の波状沈線による区画帶に、横位沈線につながるJ字状沈線文を施す(11)。
- ・12は破片であるが、体部上半に横位沈線とS字状と思われる沈線文が施される。18は口縁部に横位沈線を施し、波状部下に刺突を施した隆帶を貼付ける。また胴部は曲線的沈線(詳細不明)と刺突で構成される。

B群

- ・口縁部に波状沈線が施文され、体部上半には2段で構成されるU字状文を施す(14)。15も同様に数段からなるU字状文を施す。
- ・体部上半に幅広の無文帯が横位に展開し、S字状文を構成する(22)。13は破片であるが、体部上半に横位沈線とS字状文を施す。
- ・以下は破片であるが、16は体部上半に橢円状文を施し、19は波状口縁の内外面に隆帶を貼付け、外面隆帶に刺突を施す。

上記の文様構成などがみられるが、土器は残存状態が悪く大半が破片であるため、文様構成の詳細は不明瞭である。また20・21は口縁部片であるが、刺突を施した隆帶が貼付けられ、口頸部文様帶に広がりがみられる。これは19を含めて次段階的要因であり、後出的と考えられる。

この他に、2個体の注口土器が出土している(23・24)。23は貼付け・沈線・刺突により文様が構成され、注口部には人面が描かれる。文様構成からは中期末葉～後期初頭の範疇といえるであろう。24は無文で構成され、頂部には把手が付けられる。器形は23とほぼ同様であり、また目視の限りでは胎土も類似することから、23と同一段階の範疇としてさしつかえないと思われる。これらに類似する土器として、小型ではあるが青森市三内遺跡(県教委 1978)のJ-14号竪穴住居跡の床上5cmの地点から出土した双口土器がみられる。また螢沢遺跡の遺構外からも類似する小型土器が出土しているが、詳細は不明である。23には赤色顔料が付着し、24は内部に赤色顔料が納められた状態で出土しており、特殊性がうかがわれる。また、石棺墓や他の遺物にも赤色顔料が付着しており、これらの土器との相關性が推測される。これらの注口土器は第1号遺物包含層の様相から、中期末葉の可能性がたかいと思われる。ただし、単体での出土であったため、その編年的位置付けに明瞭さを欠くといえるかも知れない。しかし、中期末葉～後期初頭であることは間違いないであろう。

後期初頭

後期初頭の初期的段階とされる上村式・牛ヶ沢(3)式相当の土器群である(25~27)。出土総数は少なく、器形を把握することができるのは2点のみで、口縁部が外反・内反するものがみられる。文様構成は、押圧や刺突を施した隆帶による区画を基本とする。25は押圧を施した隆帶により口頸部を区画し、口縁の波状部に区画隆帶につながる円形状の隆帶を貼付ける。胴部にはU字状沈線文が施され、

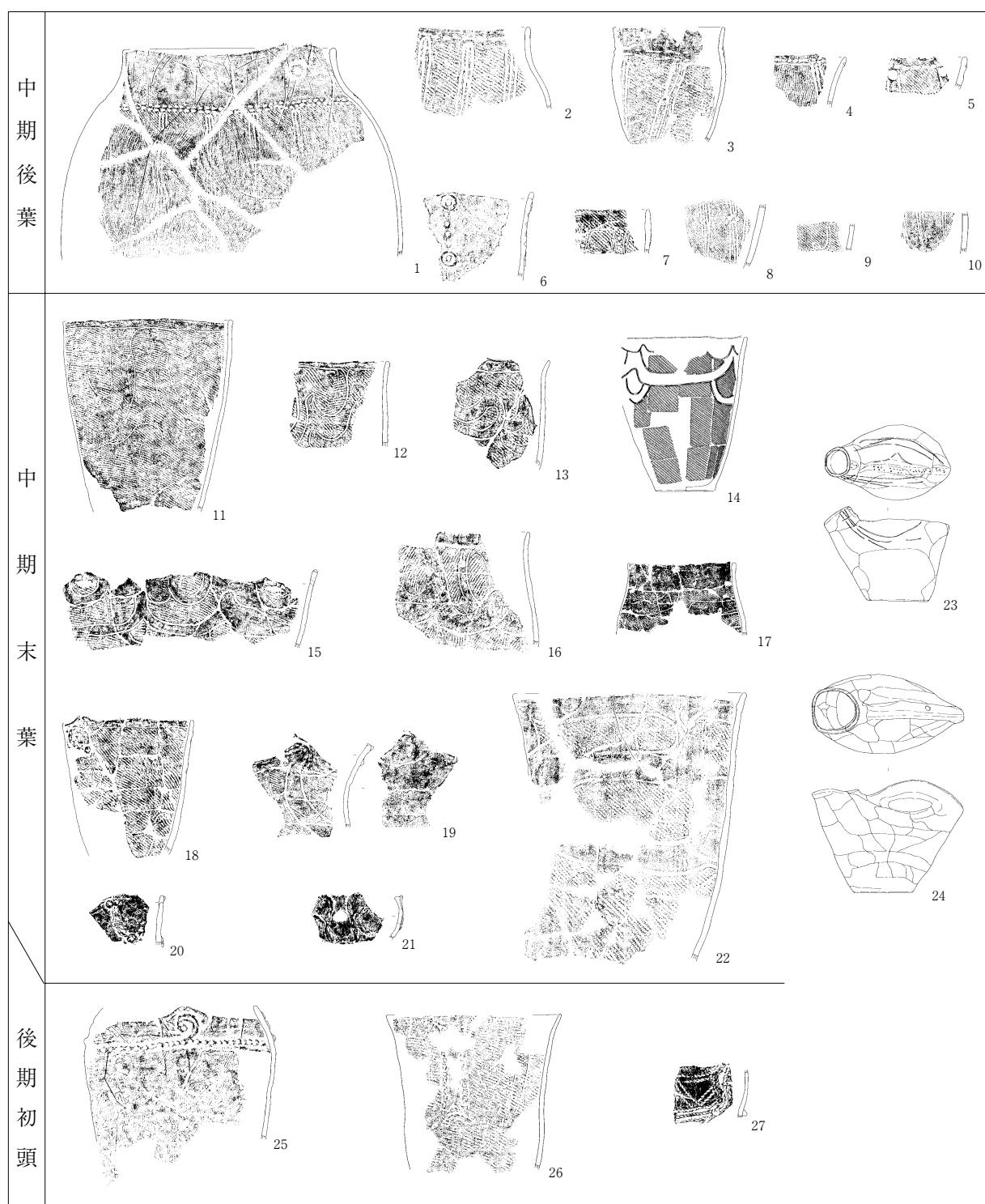


図3 第1号遺物包含層出土土器

1 : S = 1/12

2 ~ 27 : S = 1/9

沈線間にR Lを充填する。26は地文としてL Rを施文後、体部上半を刺突を施した隆帯により方形に区画する。25は中期末葉的な沈線文であるが、隆帯は太く押圧が前段階に比べて大きいことから、上村式・牛ヶ沢(3)式段階に相当すると思われる。また隆帯の位置は25が口頸部であり、26は体部上半に拡大されることから、26が後出的といえるかも知れない。27は胴部片で、隆帯とLの原体押圧により文様が構成される。

(3) 第1号捨て場出土土器(図4)

第1号遺物包含層の北西に続く緩斜面と平場に形成されている。捨て場の下位からは大型住居などが検出されており、これらの窪地を利用して捨て場が形成されている。捨て場からは、縄文時代中期前葉～晚期前葉の土器が出土し、中期末葉の大木10式に併行する土器群が主体となる^(注3)。ここでも大木10式土器を主体にし、その前後型式について述べる。

中期後葉

榎林～最花・中の平3式に相当する土器群である。出土総数は少なく、破片のため詳細は不明である。

榎林式には深鉢の口縁部片の出土がみられる(1～4)。口縁部は波状で外反する。文様構成はR L RやR Lを地文とし、口唇部に沿って沈線が施文されるものが多く、波頂部で一端が渦巻状になる。また口縁部下には、3条を単位とする横位沈線が施文される。

最花・中の平3式には鉢(深鉢)・壺がみられる。鉢(5～9)は平口縁で外反・内反・外傾するものがある。文様は単節や複節を地文とし、頸部に区画帯となる刺突・沈線、胴部に垂下する沈線文によって構成される。口縁部は無文が主体となるが、地縄文が残るものもみられる。壺(10)は頸部で内反し口縁部は直上あるいは外反する。頸部には刺突による区画帯が形成され、残存する口頸部は無文となる。

中期末葉

大木10式土器に併行する土器群である(11～30)。深鉢・鉢・壺がみられ、深鉢が主体となる。深鉢・鉢には平口縁と波状口縁があり、外反・内反・直上・外傾するものがみられる。壺の器形を把握できるものは1点のみで、最大径は胴部中央付近にあり、胴部中央から頸部にかけて内反し、口縁部は外反する。文様を大別すると、地縄文に沈線文を施すもの(A群)と沈線間を無文とし文様を構成するもの(B群)がみられるが、A群が大半をしめる。これらの文様は、地縄文・沈線・磨消し・刺突・鱗状貼付け・隆帯の組合せによって構成されており、復元個体を中心に文様構成をみることにする。

A群

- ・口縁部の横位沈線と胴部中央付近の波状沈線により区画された体部上半に、J字状沈線文を施す(12・13)。
- ・胴部中央付近に波状沈線を施し、体部上半にJ字状文と複合する逆U字状沈線文を施し、文様間に刺突を施す(16)。
- ・胴部中央付近に波状沈線を施し、体部上半にS字状沈線文を施す(11)。
- ・口縁部の横位沈線と胴部上半の直線的な波状沈線によって区画された体部上半に、U字状沈線文を施す(20)。
- ・下半部は欠損するが、波状口縁下に刺突を充填したU字状沈線文を施し、波頂部の軸線に突起を貼付ける(22)。

B群

- ・胴部上半に沈線間を無文としたU字状文が施され、胴部中央付近には沈線により連結するJ字状沈線文が施される。波頂

部と沈線文の末端に鰭状貼付けが施され、口縁部には鰭状貼付けにつながる刺突に区画された無文帯が形成される(26)。

- ・下半部は欠損するが、口縁部から垂下する方形区画文(U字状文?)を施す(24)。
- ・胴部上半に逆U字状沈線文を施し、頸部に交差する横位沈線を施文する。また胴部中央付近には、波状ともみられる沈線が施文されるが、摩耗のため詳細は不明である(17)。

基本的には以上の文様により構成されるが、土器の遺存状態が悪く、文様構成が不明瞭なものが多数をしめ、詳細を不明とせざるを得ない。また破片資料であるが、無文帯とした口頸部に隆帯を貼付けた一群がみられる(28~30)。これは次段階的要素であり、後出的と考えられる。

27は口縁部片であるが、波状部に隆帯と刺突により人面を形成する。

後期初頭

出土総数は少なく、破片資料が大半である。上村式・牛ヶ沢(3)式、あるいは葦窓式などに相当する土器群である(31~35)。31は口縁部片でR Lを地文とし、断面三角形の細い沈線を施文する。32は胴部片でLを地文とし、31と同様な沈線を施文する。33は口頸部片でLの原体押圧により文様を構成する。31~33は沈線と縄文原体の押圧であるが、文様パターンは類似しており同一段階として捉えた。34は底部片であるが、R Lを地文とし縦走する隆帯を貼付ける。地文は磨消され部分的に残存するのみであり、底面には網代痕がみられる。35は区画隆帯が施された頸部下に、横位に展開する8段の爪形押圧文が施される。波状部下の隆帯には突起状の貼付けが施される。このような土器は従来から、新潟県地方の後期初頭に位置する三十稻場式土器との関連性が指摘され、八戸市丹後谷地遺跡(八戸市教委 1986)の第8号土坑・同沢堀込遺跡(県教委 1992)のB区・同葦窓遺跡(県埋文 1984)の遺構外などから類例が確認されており、丹後谷地遺跡においては後期初頭の土器が共伴する。

(4) 第2号捨て場出土土器(図5)

第1号捨て場とはエリア・様相が異なり、前期後葉の円筒下層d式を主体とし、中期前葉の円筒上層b式までの土器が出土している(注4)。なお、上層b式は破片のみの出土であったため、ここでは下層d式→上層a式土器についてふれることにする。

この捨て場から出土した土器は、大半が円筒下層d式である。1はd1式に相当し、胴部径が他の土器に比べて細く、体部下半は膨らみをおび、胴部上半から頸部にかけて内傾気味となる。口縁部は外反し、平口縁となる。口頸部文様帶は2.4cm程の幅で縄文原体が横位に平行して押圧され、胴部文様は単軸絡条体による縦走縄文と羽状縄文により簾状となる。これら以外の土器については、d2式またはd2式的要素が強い土器である。器種は深鉢を主体とし鉢・浅鉢・台付鉢がみられ、器形的に多様化する時期といえる。深鉢の器形は、平口縁が大半で底部から口縁部にかけて緩やかに外傾するものや、頸部で内反し口縁部が外反するものが主体となり、胴部が丸みをおびるものもみられる。口頸部文様帶の幅は3~5cm前後となり、縄文原体を横位・斜位に平行して押圧するものが主体となる。また幅が広いものには、波状口縁や隆帯を貼付けるものもみられ、次段階的要素が色濃く反映される。胴部文様は多軸絡条体が多くみられ、単軸絡条体(縦走・木目状)・羽状縄文・単節縄文などが施される。

円筒上層a式土器は前段階に比べて少なくなるが、エリアを異にして調査区外におよぶ可能性もある。器形はやや丸みをおびた胴部から頸部にかけて内反し、口縁部は外反する。口縁部は平口縁と波

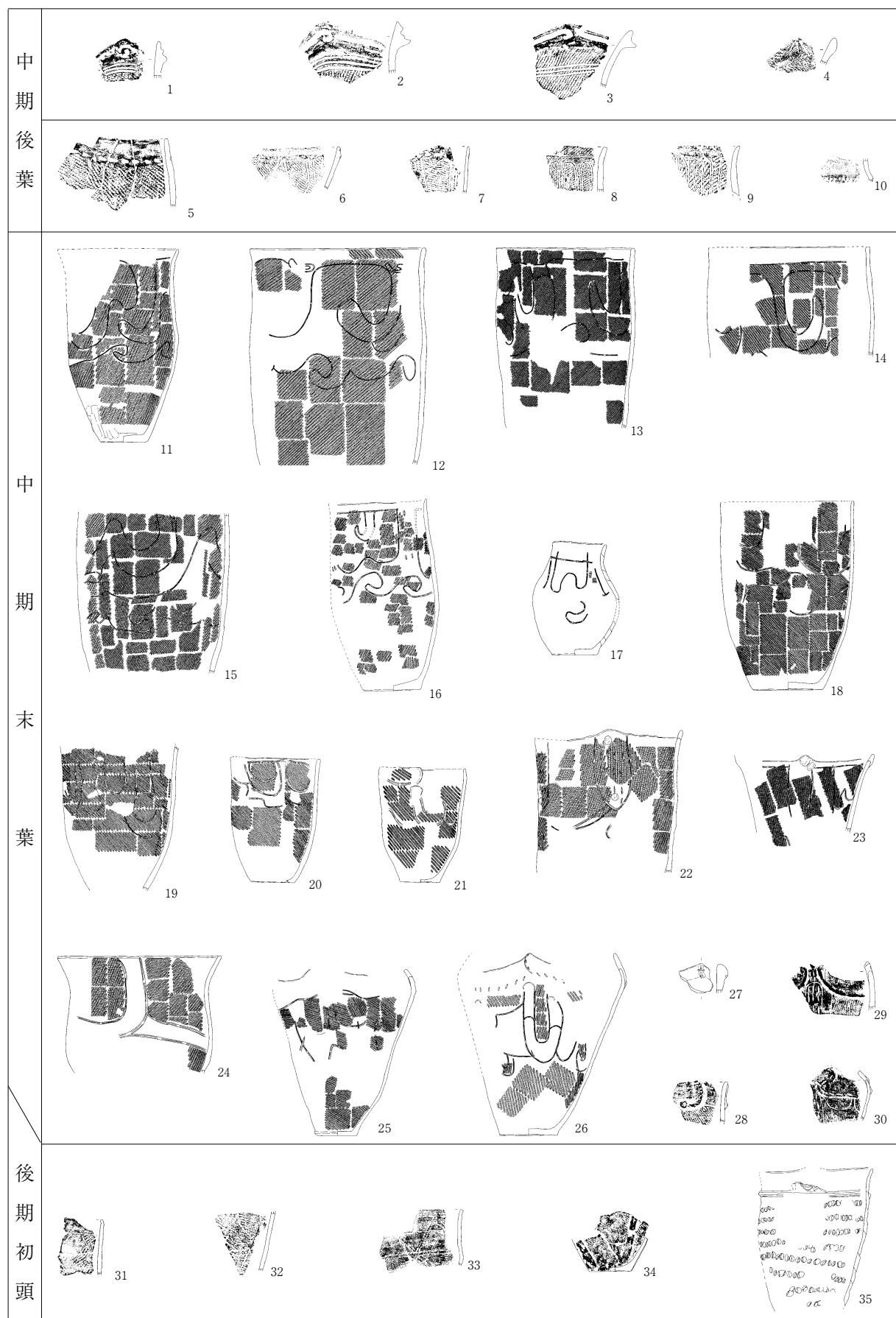


図4 第1号捨て場出土土器

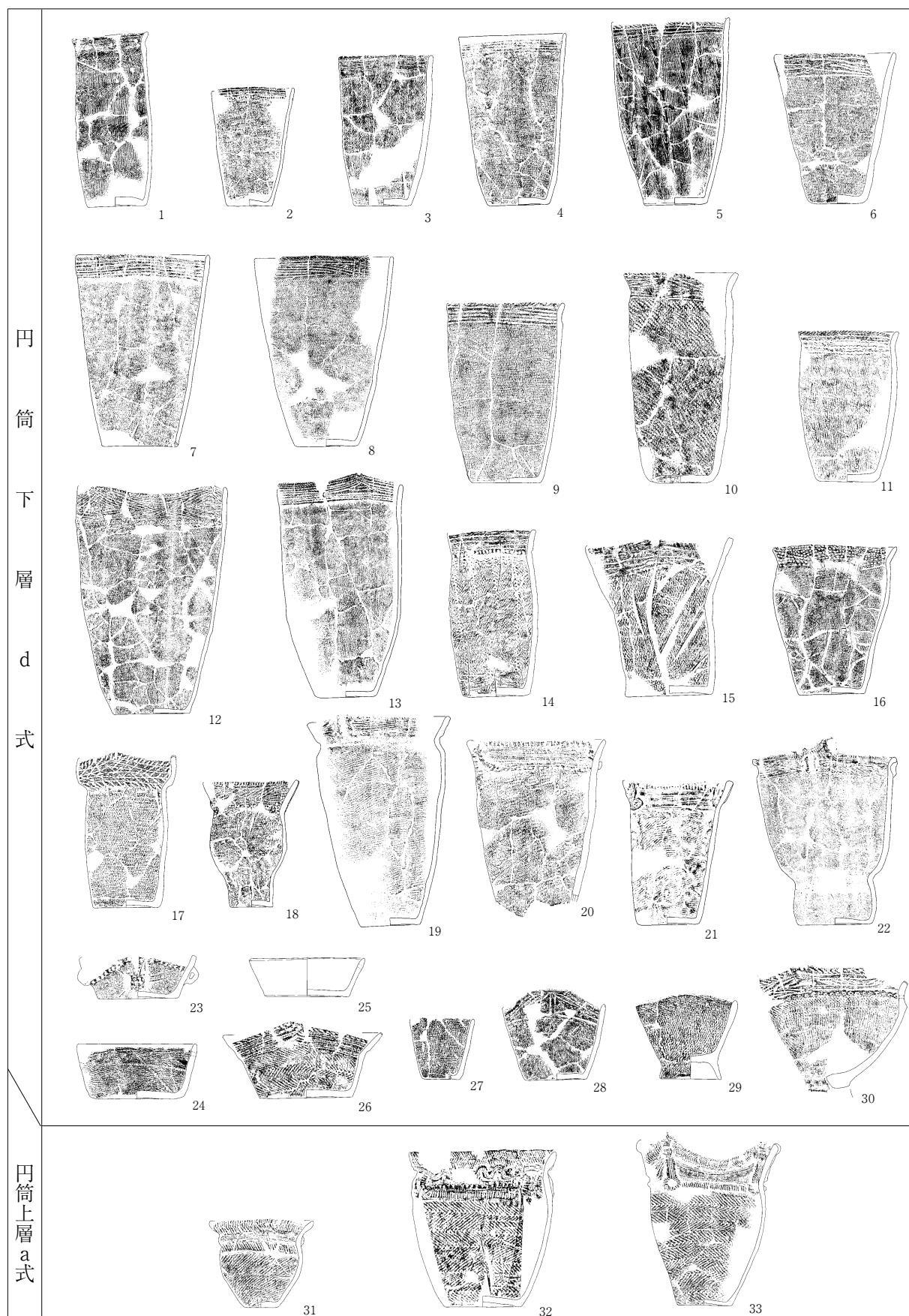


図5 第1号捨て場出土土器

1・3・6・9・11・14・15・17・20・23~33:S=1/9
2・4・5・7・8・12・13・16・18・19・21・22:S=1/12

状口縁がみられるが、装飾性にとむ波状が多くなるようである。文様構成は、頸部に施された1条の隆帯により区画された口頸部文様帯に縄文原体を押圧し、胴部には単節縄文もみられるが、横位の羽状縄文を施すものが多くなるようである。

4 まとめ

本遺跡からは数時期にわたる遺構・遺物が確認されており、縄文時代前期後葉・中期末葉に至っては大規模な集落が営まれていたことが推察される。ここでは、主体の一翼を担う中期末葉の土器を中心に考えることにする。土器の特徴を端的に表現する要因として文様構成があるが、本遺跡から出土した土器は胎土の成分に起因すると思われるが、残存状態が悪く詳細な文様構成を把握できるものは少ないといえる。この状況から器種組成の主体となる深鉢について、復元個体から文様構成をみるとする。文様構成的には、地縄文に沈線文を施すタイプ(A群)と沈線間を磨消しにより無文とし文様を構成するタイプ(B群)が存在し、A群が主体となる。これらは第7号竪穴住居跡の第3号石囲炉から共伴することがわかり、同時期に2つのタイプが存在したことは間違いないといえる。

A群

- ・口縁部の横位沈線と胴部中央付近の波状沈線による区画帯に、J字状沈線文を施す(図3-11・4-12・13)。
- ・胴部中央付近に波状沈線を施し、体部上半にS字状沈線文を施す(図1-19・20・4-11)。
- ・口縁部の横位沈線と胴部上半の直線的な波状沈線による区画帯に、U字状沈線文を施す(図4-20)。
- ・胴部中央付近に波状沈線を施し、体部上半にJ字状文を複合する逆U字状沈線文を施し、文様間には刺突を施す(図4-16)。

B群

- ・口縁部に波状沈線を施し、体部上半には2段で構成されるU字状文を施す(図3-14)。
- ・体部上半に横位に展開する幅広のS字状文を施す(図3-22)。
- ・胴部上半にU字状文を施し、胴部中央付近には沈線により連結するJ字状沈線文を施す。波頂部や沈線文の末端に鰐状貼付けが施され、口縁部には鰐状貼付けにつながる刺突に区画された無文帯を形成する(図4-26)。

これらの土器は、文様構成の相違から数段階の変遷があることが推測される。本遺跡においては、U字状沈線文(U字状文)を施す土器の胴部中央付近にみられる沈線に横位化あるいは消失するものがみられる。この傾向は後期初頭における方形区画文系への文様モチーフの変遷過程にみられる要因の一つと思われる。このことからJ・S字状→U字状への文様変遷が考えられる。また後期初頭の段階では、口頸部文様帯の幅が広くなることから、幅広となる口頸部無文帯と隆帯の貼付けによる文様帯の変化も次段階への系譜の一つであり、後出的な要因と考えられる。本遺跡においては、A・B群の土器が共伴しており、鈴木の地域差に一致するといえる(鈴木 2000)。またA群とした地縄文に沈線

文を施すものが主体となり、B群とした沈線間を無文帯とするものが少ないと傾向にあることは、柳沢清一が論じる如く（柳沢 1980・1988）、A群がB群の系譜上にある大木10式土器の影響を受けて成立・発展したことを物語るようである。

本稿においては、調査報告書において記載することができなかつた土器について、事実記載を中心に「まとめ」として記載した。遺跡からはまた中期末葉～後期初頭の石棺墓が検出され、同時期と考えられる赤色顔料が納められた注口土器も出土している。石棺墓には赤色顔料の可能性がある付着物の痕跡があり、注口土器との相関性も考えられる。また、第1号捨て場からは大量の土偶やミニチュア土器が出土しており、祭祀的性格をうかがうことができる。これらについても今後深く探求し、当時の縄文社会の一端を導くことは重要であるが、それらについては稿を改めることにする。

（注1）遺跡の一部が保存されたため、未精査のものもあるが、これらは精査した遺構数である。

（注2）第1号遺物包含層の下位から検出された遺構は、保存エリアとなつたため未精査である。

（注3）報告書において、図126-503は大洞C1式としたが、体部文様構成は入組文で構成されることから、大洞B2式相当とするのが妥当と考えられる。

（注4）報告書において、自身の認識不足により一部の土器を第I群として円筒下層c式としたが、円筒下層d式とするのが妥当と考えられる。また観察表に多軸絡条体を単軸絡条体と記載したものがあり、お詫びして訂正したい。

引用文献

青森県教育委員会	1978	『青森市三内遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
青森県教育委員会	1992	『沢堀込遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第144集
青森県埋蔵文化財調査センター	1984	『垂窪遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第84集
青森県埋蔵文化財調査センター	2000	『餅ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第278集
青森市螢沢遺跡発掘調査団	1979	『青森市螢沢遺跡発掘調査報告書』
八戸市教育委員会	1986	『丹後谷地遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集
江坂 輝彌	1956	『各地域の縄文式土器－東北－』『日本考古学講座3』河出書房
鈴木 克彦	2000	「東北地方北半部の中期・後期区分に関する編年学的研究(上)－大曲1式などの中期末葉の土器群－」『縄文時代』第11号 縄文時代文化研究会
成田 滋彦	1984	「東北地方北部の大木10式土器周辺」『奥南』3 奥南考古学会
成田 滋彦	1989	「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観4』小学館
丹羽 茂	1981	「中期の土器－大木式土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』雄山閣出版
本間 宏	1985	「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』第1号 よねしろ考古学研究会
本間 宏	1987	「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)－東北地方北部を中心に－」『よねしろ考古』第3号 よねしろ考古学研究会
本間 宏	1988	「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)－東北地方北部を中心に－」『よねしろ考古』第4号 よねしろ考古学研究会
柳沢 清一	1980	「大木10式土器論」『古代探叢』早稲田大学出版部
柳沢 清一	1988	「大木10式土器統考」『北奥古代文化』第19号 北奥古代文化研究会